



## L2英語学習者による3人会話にみられる繰り返し

木原, 恵美子

---

**(Citation)**

日本認知言語学会論文集, 22:426-431

**(Issue Date)**

2022

**(Resource Type)**

journal article

**(Version)**

Version of Record

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100485263>



## L2 英語学習者による 3 人会話にみられる繰り返し

木原恵美子 (神戸大学)

### 1. はじめに

英語の構文には生産性が高い構文と高くない構文が存在する。たとえば、(1) のように英語の他動詞構文や使役移動構文では、通常は自動詞 (smile) や名詞 (utube) として使用される語が他動詞として生起することがある。これに対して、英語の同族目的語構文 (2) には (1) のような生産性の高さはない。さらに、英語学習者が使用することはあるけれども、英語母語話者は違和感を覚えるため使用を避ける表現 (3) もある。

- (1) a. She smiled him in the door.  
b. I cannot believe she utubed the lyrics. (Goldberg 2019: 61-62)
- (2) a. She smiled a friendly smile.  
b. ?She laughed a friendly smile.
- (3) #She explained me this. (cf. She explained this to me.) (ibid.)

このように、英語の構文の生産性は均一ではなく、偏っており、限定的である。構文の部分的生産性 (partial productivity) を説明しようと試みた Goldberg (2019: 73) では「ある構文が様々な拡張例で使用されるのを経験すると、その構文はさらに生産的に使用される傾向がある」と述べられている。この傾向を確認するために、Hernandez et al. (2019) は、4-6 歳児の英語母語話者に語選択課題 (名詞の単複変化規則) を行った。その結果、①メッセージを発信したいという望み (desire to communicate a message) と②話者が会話時にアクセスできる形式によって、構文の生産性 (この場合は名詞の単複規則変化の一般化) は変化しうることが明らかになった。本研究では、L2 英語学習者の 3 人会話における繰り返し (repetition) の生産性は、① L2 のスピーキングスキルのレベルと②会話への参加態度 (engagement, Goodwin 1981) の影響を受けうることを示す。

### 2. 会話における構文響鳴

本研究では、L2 英語学習者の会話における構文を分析するにあたり、響鳴 (resonance, Du Bois 2014) の概念に基づいて、響鳴表現に着目する。響鳴は、意図、状況、スタンスの差などを反映して、繰り返し、変形、代入、言い換えなどによって実現されるものである (崎田 2013: 559, Du Bois 2014)。たとえば (4) では、名詞 drama が 2 人の話者により繰り返し使用されているだけでなく、there 構文も同一話者 (Jill) により繰り返し使用されている。

- (4) (*Hey Cutie Pie* SBC028: 70.075-80.730)
- 1 JILL; You missed like all the drama here.  
2 (H)  
3 JEFF; No drama.  
4 JILL; Yeah,  
5 there was such drama.  
6 There was drama,  
7 and there was suspense.  
8 (H) And then there was relief,

(4)では語彙響鳴と構文響鳴がみられるが、この2つの他にも指示響鳴、語用論的な響鳴などがある。このように響鳴は自然会話で広く観察される。

特に、響鳴のなかでも繰り返しには、(5)のように語末のイントネーションが上昇する繰り返し (repetition with upward intonation) と、(6)のように語末が下降する繰り返し (repetition with downward intonation) がある。(以下の話者 A と話者 C は、表3と表4の話者 A と話者 C に対応する。)

- (5) 01 A: No, I mean on Saturday maybe we can do it.  
02 C: Saturday? Wow. Mmmm.
- (6) 01 A: But you are familiar with that piano.  
02 C: Am... just familiar, I cannot still play it.

(5) の繰り返しは驚きや興味といった感情的スタンスを表す (Svennevig 2004) ことが多く、(6)の繰り返しは同意 (agreement)、承認 (acknowledgement)、確認 (confirmation tokens) を表す (Schegloff 1996) ことが多いと言われる。さらに具体的には、繰り返しがよくみられる L2 会話には、母語話者と非母語話者による2人会話 (Svennevig 2004) や、初心者レベル (novice) の L2 英語学習者 (日本人大学生) による2人会話 (Greer et al. 2009) があることがこれまでに報告されている。本研究では、中級レベルの L2 英語学習者の3人会話における (5) や (6) のような繰り返しを分析対象とする。

### 3. L2 会話のパターン

L2 英語学習者の会話の展開にはいくつかのパターンがあることがすでに特定されている。Galaczi (2014) が、ケンブリッジ英語力検定試験のスピーキングテストの面接官 (母語話者) と受験者 (L2 英語学習者) の2人会話を分析した結果、会話の流れが表1のように分類された。話し手と聞き手の相互性 (mutuality)、平等性 (equality) の高低と、話題導入 (topic initiation)、話題展開 (topic extension)、最低限の承認 (minimal acknowledgement) に基づくと、会話を4パターン (collaborative, parallel, asymmetric, blended) に分類できることが明らかになった。

表1 Galaczi (2004: 184) 一部改変

Interactional characteristics	Collaborative interaction	Parallel interaction	Asymmetric interaction	
			Dominant speaker	Passive speaker
Mutuality	High	Low	Low/High	
Equality	High	High	Low	
Structure of Prototypical topic Development sequences	A: Topic initiation + topic building	A: Topic initiation + topic building	A: Topic initiation + topic building	
	B: Topic extension	B: Minimal acknowledgement + Topic initiation	B: Minimal acknowledgement	
	A: Topic initiation + topic initiation	A: Minimal acknowledgement + Topic initiation	A: Topic extension	

本研究の観察対象

本研究で取り扱う会話は L2 学習者の 3 人会話であるが、参加者のスピーキングスキル (CEFR B2+:1 名、B1:1 名、A2:1 名) には偏りがあり、対称性が高い会話 (collaborative interaction) も展開されなかったため、非対称な相互行為 (asymmetric interaction) に分類できる。また、表 1 の分類に従うと、本研究で取り上げる繰り返しは、トピックに対する最低限の承認 (minimal acknowledgement) として使用された繰り返しとなる。(同一話者による同一ターン内の繰り返し (言い直し) は本研究の考察対象外とする。)

#### 4. データ分析

本研究で取り扱う会話データは、日台交流 (オンラインディスカッション) に参加した日本人大学生 1 名 (CEFR B1) と台湾人大学生 2 名 (CEFR A2 と B2+) による会話である。この 3 名は 11 回のディスカッション (38 時間 10 分) を行ない、10 回目のディスカッションで参加者 2 名による繰り返しの頻度が高くなったため、その会話 (3 時間 38 分) を詳細に分析した。その会話は [A.近日常に再びオンラインミーティングをするためのスケジュール確認] から始まり、[B.近況報告]-[C.大学入試の面接]-[D.子供の頃の遊び]とトピックを変え、最後に (事前に各自で見えておいた TED トークに関する) [E.経済成長の原理] へとトピックが変化しながら進行した。そもそも 11 回のディスカッションは、参加者全員が毎回話すテーマを事前に決めて、各自が下準備をしてから行われたが、本研究で取り上げる会話における[A.スケジュール確認]と[E.経済成長の原理]も参加者全員が話すことを事前に決めていたトピックである。これに対して、[B.近況報告]-[C.大学入試の面接]-[D.子供の頃の遊び]は即興で話されたトピックで、いわゆる雑談であった。この会話全体におけるトピックごとの繰り返しをまとめると表 2 のようになった。

表2

会話の内容	トピック	繰り返しが観察されたターン数	ターン数全体	繰り返しの割合
A. スケジュール調整 (18分10秒)	事前予定済	17	163	10.4%
B. 近況報告 (32分30秒)	即興	11	190	5.7%
C. 大学入試の面接 (44分20秒)	即興	18	269	6.7%
D. 子供の頃の遊び (57分8秒)	即興	25	694	3.6%
E. 経済成長の原理 (65分31秒)	事前予定済	28	233	12.0%

さらに、繰り返しの割合が多い会話を分析し、話者ごとの繰り返し頻度を表 3 にまとめた。

表3

会話の内容	話者A CEFR B2	話者B CEFR B1	話者C CEFR A2	全ターン数
A. スケジュール調整	4 (6.1%) 上昇 0 下降 4	1 (3.9%) 上昇 1 下降 0	12 (19.3%) 上昇 11 下降 1	163 (A:B:C=65:36:62)
B. アカデミック (経済成長の原理)	13 (5.6%) 上昇 5 下降 8	9 (10.5%) 上昇 4 下降 5	6 (13.9%) 上昇 4 下降 5	233 (A:B:C=105:85:43)

上昇：上昇イントネーション 下降：下降イントネーション

まず、[A.スケジュール調整]の会話において、CEFR A2 レベルの話者 C による繰り返しの頻度が最も高くなり、そのなかでも驚きや興味を示す上昇イントネーションの繰り返しが 11 回 (92%) を占めた。これに対して、[E.経済成長の原理]についての会話、つまりアカデミックな会話で、B2+レベルの話者 A による繰り返しの頻度が高くなった。ただし、話者 A のターン数に対する繰り返しの割合は、スケジュール調整の会話時とあまり変わらなかった。繰り返しの割合の変化が大きいのは、CEFR B1 レベルの話者 B で、アカデミックな会話で繰り返し頻度が、スケジュール調整の会話に比べて 269%も増えた。

話者 A-C ごとに実際に繰り返された表現をまとめたのが表 4 である。(ピリオドやクエスションマークがついていないものは文中で繰り返された表現である。)

表4

会話の内容	話者A CEFR B2	話者B CEFR B1	話者C CEFR A2
スケジュール調整	4 On Saturday. It depends. how to say in Japanese It will be hard to (...)	1 ride a bicycle?	12 Saturday? familiar Dark? Natural lights? Elegant? Court yard? Donut? On Saturday? Earlier? Very early? In moving time? Transporting?
アカデミック (経済成長の原理)	13 Extreme unfairness. Science magazine. Political Philosopher. Free market is? Left the market? Restriction is not enough? Simple control.	9 Extreme? Science? Science magazine. wealthy for many years Restriction is not enough. The reason Ford bureaucratic? Willingness?	6 Extreme? Science? Understand What he said is Mind map? Trust

表 4 より、繰り返しとはいえ、話者の英語力と会話の内容によって繰り返される語の長さや語彙レベルが異なることがわかる。まず、話者 A は 2 語以上の表現で、比較的難易度が高い語を用いて繰り返す傾向が見てとれる。次に、話者 B は、話者 A ほどではないが、話者 C よりも難易度が高い語を用いて、2 語以上の表現もしばしば繰り返したことがわかる。最後に、話者 C は会話の内容に関係なく、主に 1 語を繰り返し使用し、繰り返した語彙レベルも話者 A ほどは高くない。興味深いのは、話者 C が繰り返した表現は会話の内容の影響をほとんど受けておらず、語彙レベルもほとんど変化しなかった点である。

## 5. 考察

このたびの会話 A-E のうち、[A.スケジュール調整]と[E.アカデミックな会話]で話者 A と話者 C による繰り返しの使用が増えたのは、少なくとも両者がこの会話において「共通基盤や共通理解の構築が必要だ」と感じていたからだと思われる。(両者のターン数は話者 B に比べて 1.8 倍程度多

い。) これに対して、話者 B は「アカデミックな会話」に取り組むことを強く希望し、実際に話者 B が会話 E でトピックを開始 (topic-initiation) していたこともあり、[E.アカデミックな会話] における話者 B の参加態度 (engagement) は高い状態だったと考えられる。

この一方で、即興のトピックである[B.近況報告]-[C.大学入試の面接]-[D.子供の頃の遊び] について会話をしているときは、三者全員が終始リラックスしており、時々笑い声も聞こえ、会話に対する集中力はそれほど高いようには見えなかった。

以上より、まず、L2 話者の会話における繰り返しの生産性は、L2 のスピーキングスキルと会話への参加態度の影響を受けるといえるだろう。次に、繰り返される語彙のレベルや語数は、話者がそのときにアクセスできる形式そのものであり、その語彙と形式の複雑性は話者のスピーキングスキルや認知能力の影響を強く受けるといえるだろう。

## 6. まとめ

今回取り上げた 3 人会話のデータは全 38 時間中の 3 時間程度である。もちろん、残り 35 時間の中にも、繰り返し表現は確認されたが、今回のデータ (10 回目のオンラインミーティング) のように高頻度で繰り返しが観察されたわけではない。そのため、繰り返しの生産性は話者同士の親密性の影響も受けうることが考えられる。しかし、この点については会話データを時系列に追跡する必要があるため、今後の課題としたい。

本研究より、L2 多人数会話においても、構文の生産性は会話に参加したいという気持ち (Hernandez et al. 2019) の影響を受ける可能性が明らかになった。このように会話のなかの構文を分析することで、話し手と聞き手の多様性、コンテキストの多様性、協働行為の多様性を少しずつ明らかにすることが可能になり、言語運用の動的な側面の解明が進むことが期待できる。

\*本研究は JSPS 科研費 基盤研究(C) 研究課題 20K00680 「構文学習における構文の限定的生産性の探索研究」の助成を受けたものです。

## 参考文献

- Du Bois, John. (2014) "Towards a Dialogic Syntax." *Cognitive Linguistics* 25(3): 359–410.
- Galaczi, Evelina. (2004) *Peer-peer Interaction in a Paired Speaking Test: The Case of the First Certificate in English*. Unpublished Ph.D. thesis, Columbia University.
- Goldberg, Adele. (2019) *Explain Me This: Creativity, Competition, and the Partial Productivity of Constructions*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Goodwin, Charles. (1981) *Conversational Organization: Interaction between Speakers and Hearers*. New York: Academic Press.
- Greer, Tim, Andrade Vivian S. Bussinguer, Jeff Butterfield, and Agnes Mischinger. (2009) "Receipt through Repetition" *JALT Journal* 31 (1) [<https://doi.org/10.37546/JALTJ31.1-1>]
- Hernandez, Alexia, Sammy Floyd, and Adele Goldberg. (2019) "Productivity Depends on Communicative Intention and Accessibility, Not Thresholds." *Proceeding of Cognitive Science*. pp. 428-43p
- 崎田智子. (2013) 「対話における発話の創発—認知と対話のインターフェース」 児玉一宏・小山哲春 (編) 『言語の創発と身体性—山梨正明教授退官記念論文集』 pp. 547-562. ひつじ書房.
- Schegloff, Emanuel. (1996). "Issues of Relevance for Discourse Analysis: Contingency in Action, Interaction, and Co-participant Context." In Eduard Hovy H. and Donia R. Scott (Eds.),

*Computational and Conversational Discourse: Burning Issues—an Interdisciplinary Account*. pp.3-38.  
Heidelberg: Springer.

Svennevig, Jan. (2004). "Other-repetition as Display of Hearing, Understanding and Emotional Stance." *Discourse Studies* 6: 489-516.